

巻頭言

正確、迅速な病害虫診断が冤罪、
風評被害を防ぐ

東京都農林総合研究センター ^{たけ}竹 ^{うち}内 ^{じゅん}純

突然に起きる不可解で深刻な状況を冷静に観察し、客観的に判断することは極めて難しい。日頃から生産者に寄り添っている普及指導や営農指導に従事する方々は篤農家の意見に疑念を抱くことや、反論的な質問をすることを躊躇することもあるかも知れない。しかし、初動で間違った方向に進むとその後の修正は容易ではない。

私が経験した事例を紹介しながら、植物防疫を担う次世代の方々にちょっとアドバイスできればと思う。

1. 東京都西部の山間地のリンゴ園で葉がミイラ状に枯れて枝に貼りついたりする今までに見たことのない症状が発生し、生産者は驚き、近在する産業廃棄物処理場が関係しているのではとの噂が広がった。その地域のほとんどのリンゴ園で、どの品種にも同じ被害が起きたため、そのような考え方に結びついたのであろうか。しかし、この現象はすべて多犯性の植物病原菌である *Rhizoctonia solani* AG-IIB によるものであり、分離、再現、再分離等の実験結果を示し、生産部会員の産廃施設への疑念は払拭された。所謂「くもの巣病」である。

2. 東京都の島しょ部において梅雨明けと同時に極相林のスダジイが一気に赤変し、山全体の景観が変わる異常事態となった。普段から硫黄臭がする地帯であったこともあり、火山性ガスではないかななどの問い合わせが多く寄せられた。見たこともない現象を普段から懸念していることと結びつけて噂になり、広がっていく自然の流れと考えられる。実際に樹林の調査に行くと萎凋枯死しているスダジイの幹には大量のフラスが生じていたため、幹内部を調べると褐変腐敗した組織に多数の孔道があり、キクイムシの幼虫が観察され、幸いにも成虫も確保できたためカシノナガキクイムシ伝搬の *Raffaelea* 属菌による集団枯損と判断できた。所謂「ナラ枯れ」である。その後は東京都が依頼した森林総合研究所の所 雅彦博士他専門家チームが本格的に調査を行い、住民説明会を実施するなどして平静な状況となった。

3. その他、市役所の道路工事で自宅庭木が次々枯れ

出したとの行政クレーム発生、でも実は白紋羽病でしたとか、誰かが圃場に油をまいて枝が枯れていると農家は訴えるが実はくもの巣病でした、とか、清掃工場周辺で植物に異常が出ているとの騒動の原因はササのスゴモリハダニやツタ褐色円斑病であったなど、色々と思ひ込みや思い入れが強過ぎて科学的なエビデンスを示しても納得が得られない事例も多々あった。

現役時代の思い出は大半がこうしたトラブル対応であった。病害虫自体が生産者や栽培管理者にはトラブルであり、植物に関する苦情処理は植防関係者の宿命なのであろう。

日々沢山の相談や診断依頼を受けられている最前線で活躍されている現役世代に年寄りから一言。どんなに優秀でも個人の能力には限界があり、視野も一人分しかない。私が長らく身を置いている植物防疫の分野には非常に強力な見えないネットワークがある。それは制度とかメーリングリストとかではなく、困ったら助け合う文化が醸成されていることである。正に「植防一家」。現場の問題解決のため、文献を頼りに面識のない方々、大先生にでも教を乞い、情報収集して初動で植防の専門家として正しい判断をすることが重要。文献調査も容易となった現在、是非、トラブル解決をネタに人脈ネットワークを広げていただきたい。

自分の専門分野に拘りつつ、ウイルス、微生物、害虫、雑草、獣害、大気汚染・気象・生理障害、薬害等に幅広く興味を持ち、何かあれば専門家を頼りにトラブルの最前線で誤った噂話に屈しない植防関係者としての意地を示していただけることを期待する。

状況を広く見渡し、小さな異変を客観的に見つけ、的確な原因究明を行い、最適な対策を講じることが植防関係者の使命である。

(関東東山病害虫研究会 会長)